ばっくとぅざぱすと　その四五

フィールドに躓く

フィールドワークといえば、かつては文化人類学（や社会学）の独擅場だった――と過去形で記したほうがよいのだろうか。その学問分野のおおまかな動向をみると、前川啓治ほか『21世紀の文化人類学―世界の新しい捉え方』（新曜社、二〇一八年）はその冒頭の「はじめに」に、「文化人類学はかつてフィールドワークという方法論を含め、種々の社会科学、人文学に原理的な方向性を示す学問であった。それが現在では人類学が参照されなくなっている」と掲げ、それゆえになのか、同書はとりたてて「フィールドワーク」をめぐる章や節をたてていないのだ。田中雅一の『誘惑する文化人類学―コンタクト・ゾーンの世界へ』（世界思想社、二〇一八年）も、その副題にあらわれているとおり、「コンタクト・ゾーン」が一つの主題で、もはやそれが「フィールド」の語にとってかわったかの観がある。

とはいえ、これら二著発行の前年に刊行された、川口幸大『ようこそ文化人類学へ―異文化をフィールドワークする君たちに』（昭和堂、二〇一七年）をみると、これまたその副題にみえるとおり、「フィールドワーク―文化人類学の方法論」と題した章をおき、「フィールドワーク」（これを「研究室や図書館ではない、屋外の現場に出かけていって行う調査」という）が依然として文化人類学の重要な方法であるとの姿勢をとっているとみえてしまう。ただし、同書ではその「屋外の現場」を、わが身と切り離された、顕微鏡でのぞくプレパラートの世界のごとくとらえてはいない。著者は、E・W・サイードと太田好信を参照して、「調査がはらむ暴力性」や「文化を語る権利は誰にあるのか」という指摘や問いを提示し、調査や研究やその行為者とその原理をも論じるところに文化人類学の意義を説く。

こうした調査や研究の原理をめぐる問いは、かつてはもっと素朴で、観察や調査という行為によってその対象がどういった変容を被るかという点に止まっていたとおもう（泉靖一「マリノフスキーとレヴィ=ストロース―人間の科学としての文化人類学」同責任編集『世界の名著　マリノフスキー　レヴィ=ストロース』第59巻、中央公論社、一九七八年版）。

さて、歴史学ではどうか。歴史学の教科課程に「フィールドワーク」を組む大学がどれほどあるか。歴史学にはその語を使うことすら避ける性向があるようにも感じる。そうしたなか、白水智の『古文書はいかに歴史を描くのか―フィールドワークがつなぐ過去と未来』（NHK出版、二〇一五年）は、その語を副題におき、その「重要性」を説く――「実物史料のもつ価値を体感し、同時にその歴史の舞台となった現場を訪ね体感できる、両方をともに味わうことのできる機会がフィールドワークなのである」。ただ、そのかぎりであれば、歴史研究者が多用する「史料調査」

の語で充分ではないか。

この著者にとって「フィールドワーク」とはなにか。彼は「歴史学の現場」という語をあわせ用いて、「調査者・研究者たる「自分」が問われる」場であり、「その家にとって、あるいは地域にとって、眼前の史料群はどのような現代的意味をもっているか［中略］現在という時間に生きる我々はどのように所蔵者や史料に接すればいいか、などさまざまなことに考えを巡らせる」場なのだと述べる。

確かに、調査者や研究者がどう振る舞おうと、彼ら彼女たちが探究しようとする過去そのものが変わるわけではない。白水はまた、フィールドでは「史料に対して、そして所蔵者に対して真摯な姿勢で臨むこと」、それがかたちづくる「信頼」もあると教えている。調査者や研究者の質が足枷となり、過去をたどる手立てが手から離れるばあいもあり得るのだ。

わたしにも、そうした場といい得る「フィールド」があった。昨二〇一八年はそこにのべ八十日間ほど滞在した。今年わたしは、そこを手放す決心をした。「フィールド」に躓いたのだ。わたしの学（がく）が、その現場で挫（くじ）いてしまった、といってもよい。その詳細をここでは述べない。学と場との衝突だった。そのことをいくらか悔いながらも、あらためて、そこにはゆかずに、その場の文化誌を書こうとおもう。

（経済学部　阿部安成）

2010 年 11 月 21 日聖日礼拝朝の国立療養所大島青松園キリスト教霊交会教会堂玄関